

資源利用と闘争回避に関する進化人類学的研究

山極 寿一

(京都大学・大学院理学研究科・教授)

【研究の概要等】

食物をはじめとする資源の利用とその配分をめぐる闘争は現代の人類社会が抱える最も根元的かつ普遍的な問題であり、そこには多くの生物学的な問題や課題が潜んでいる。本研究は、霊長類学、先史人類学、生態人類学の3つの異なる学問分野から、人類が示す資源利用とそれをめぐる闘争回避の方法がどのような進化の過程をたどってきたかを再構築し、人類に最も適した方策を検討することを目的とする。人類誕生の舞台となったアフリカの熱帯雨林を主たる調査地とし、気候や地殻変動、人為的な影響によって変化しやすい生態的資源の質と量を定期的にモニターしながら、その変化によって類人猿と人類の種間、集団間、個体間に引き起こされる葛藤、社会的資源や規範の変化について通時的に分析する。化石人類についても資料を収集し、人類の食性、身体形質、行動文化との関連についても調査する。性ホルモンやストレスホルモンを測定し、DNAを用いて集団内、集団間の血縁関係を調べ、個体の移動や集団の組み替えを介した採食や性に関わる社会性が葛藤の解決と平和の維持にもたらす役割について検討する。

【当該研究から期待される成果】

人類と近縁な類人猿、化石人類の生態的資源や社会的資源をめぐる闘争とその解決方法を進化史的に明らかにすることによって、人類の社会や文化の多様性に潜む生物学的な課題が理解可能になる。食物と性をめぐる葛藤はその最も根元的な問題であり、その要因と変化の様態を把握することが急務である。類人猿や過去の人類は現代人とは異なる方法でこの葛藤を解消してきたはずであり、それらを比較することによって人類の進化史をふまえて現代や未来の人間社会にあった方策を検討することができる。

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

- ・ Yamagiwa, J., Kahekwa, J. & Basabose, A.K., 2003. Intra-specific variation in social organization of gorillas: implications for their social evolution. *Primates*, 44: 359-369.
- ・ Yamagiwa J, Basabose AK, 2006. Diet and seasonal changes in sympatric gorillas and chimpanzees at Kahuzi-Biega National Park. *Primates*, 47 (1): 74-90.
- ・ 山極寿一, 2007. 編著『ヒトはどのようにしてつくられたか』、岩波書店

【研究期間】 平成19年度－23年度

【研究経費】 24,400,000 円
(19年度直接経費)

【ホームページアドレス】

<http://jinrui.zool.kyoto-u.ac.jp/>